

## ハイデガーにおける存在時性の問題と「西洋哲学の原初」講義 (1932年夏学期)の意義

上田圭委子(首都大学東京)

本発表の目的は、「西洋哲学の原初」講義(1932年夏学期)が、ハイデガーの後期の存在論および時間論への転回によっていかなる意義を有するかを示すことである。『存在と時間』(1927)における現存在の時間性から存在時性へと進む時間解釈の延長線上においては、現存在自身によらずに立ち現れてくる「自然」や与えられてくる「現在」の問題が、実際には随所で見て取られていたと思われるにもかかわらず、明確には主題化されていなかった。この問題が、当該講義においては、ソクラテス以前の自然哲学者の断片の時間に関する解釈によって捉えられ、初めて正面から扱われ得ているのである。

本発表では、1. ハイデガー『存在と時間』(1927)およびその前後の時期における「存在そのものの学的解釈」の一部としての「存在時性の仕上げ」という企図とその内実について見た後、2. 1932年夏学期以前の時間解釈が、『存在と時間』における見通しの延長線上にあったことを1930・31年冬学期演習におけるアウグスティヌス『告白』11巻の時間論解釈に即して確認したうえで、3. 1932年夏学期講義の内実と意義を扱うこととしたい。その概略は以下の通りである。

1. ハイデガーは、『存在と時間』(1927)において、「存在とその諸性格とその時間に基づく諸様態の根源的な意味規定性、存在時的規定性(temporale Bestimmtheit)」と名付け、「存在そのものの学的解釈という基礎存在論的な課題は、それ自身の内に存在の存在時性(Temporalität)の仕上げを含んでいる」のであり、「存在時性の問題性の解明において、はじめて存在の意味への問いの具体的な答えが与えられる」(SZ19)としていた。また「存在論の歴史の解体」を「課題」として掲げ、これを「存在時性(Temporalität)の問題性という光のなかで古代存在論の地盤を学的に解釈する」(SZ25)ことによって達成しようと企図していた。そこでハイデガーが直接に視野に入れていたのは、「時間に関するアリストテレスの論述」(Vgl.SZ26)であり、また「根本的探求の道程をわずかながら存在時性という次元の方向において進めた「唯一の人」としての「カント」の時間論であった」(SZ23)。こうした射程のもとでの存在時性についての探求の企図の内実は、主著出版前後の講義から知ることができる。25・26年冬学期講義におけるカントの「経験の類推」の時間解釈においては、「自然一般の認識を可能にするアプリアリな制約」としての「超越論的統一」が「最も先行的なもの」として「呈示」(GA21, 322)され、また図式論解釈においては、「真正な今構造が堅持され、時間へと第一次的に眼差しを向けることが非主題的であることが注意されるときにはじめて、時間は根源的な純粋な、そして普遍的な自己触発であるということが何を意味するのかが、理解される」とされ、「今継起」は「それ自身非主題的に、すなわちいわば絶えず後退しつつそして消失しつつ、その絶えざる指示において或るものを見えしめる」ものでもあり、「或るものを純粋に現成化させること(Gegenwärtigen)」とされ(GA21,401)、「自然の認識」も「特定の仕方ではなされた現成化させること」であり、「現存在」は、「自然が現存在に語りかける限りで」「《今は・・・、今は、・・・》とすることができる」(GS21,401)とされていた。広義での現成化としての「今」には、狭義の非本来的な時間理解に尽きない根源的な時間への通路もまた、潜んでいたと言える。また1927年夏学期『現象

学の根本問題』講義でのカント解釈においては、ハイデガーは、「現実性は知覚である」(Vgl.GA24,155)というカントの洞察を、パルメニデスの命題とも結びつけながら、古代ギリシア存在論の根底にある「ピュシス、すなわち事象の自然本性」から、「現実的な物(Ding)が発現する」(GA24,151)と語り、また、現存在の超越としての脱自的地平統一の図式のうち、知覚にかかわる「プレゼンツ(という脱自的地平)」(GA24,448)を特に分析するなど、現成化および現前性にかかわる問題に注目していた。この時点までのハイデガーは、このように随所で現存在の現において立ち現れてくる存在の側からの働きかけを示唆しつつも、『存在と時間』での企図の延長線上に立ち、「実存論的な分析における時間性」を、「そこから私たちが存在を了解するところの地平」(GA24,324)としての「存在時性」として捉え返し、まずは存在時性という地平から存在者一般の存在へと向かうことをもって、『存在と時間』の書かれざる第一部第3篇「時間と存在」の「新たな仕上げ」を、目指していたといえよう。

2. 1930年・31年冬学期の演習でも事情は同じである。そこで扱われる『告白』第11巻の時間論では、アウグスティヌスが、自らの「精神活動の生きた力」における「記憶」と「期待」という「二つの方向」への「分散」を語り、全生涯において見られるこの「いくつもの方向への分散状態」が「私の生命」であるとしていた。(訳はアウグスティヌス『告白』III,中公文庫、2014年、山田晶訳、76頁参照。)ハイデガーは、そこに3重の仕方で出で(ex)立つ(sistere)人間の実存の本質を見つつ、この「ex-sistere すなわち人間の Ex-sistenz」は、「時間の内にあるから時間的なのではなくて、時間自身が人間の本質であるから時間的なのである」(GA83,73)と解釈し、またアウグスティヌス時間論の淵源はアリストテレスにあることも指摘していた。ここでも、『存在と時間』における時間性・歴史性解釈の延長線上にあるハイデガーの時間に対する見方が披瀝されているのである(Vgl.SZ427)。

3. これに対して、1932年夏学期『西洋哲学の原初』講義においては、これまでの考察において西洋の時間論の出発点とみなされていたアリストテレスの時間概念とは別の原初から出発して、時間というものがそれ自体として解釈される。

第一部では、アナクシマンドロスの箴言の中の言葉「時間の配定に従って(κατὰ τὴν τοῦ χρόνου τάξιν)」が解釈されているが(Vgl.GA35,20)、そこでのクロノス(時間)は、「基準を-与えるもの」(Maß-gabe)であり、「隠れたものを立ち現れさせる」(GA35,20)「ピュシスとしての時間」でもあるとされる。ここでの時間はあらゆる存在者に関わるが、その本質は、「存在者を立ち現れさせたり、また消滅させたりする」(GA35,20)ことにあり、これまで現存在の時間性を「根源的時間」(SZ329)とみなしていたのとは、明らかに異なる時間の見方が扱われているのである。

第二部の中間考察の後、第三部で、パルメニデスの断片が解釈されるが、そこでは後期のパルメニデス解釈に共通する見方がすでに見出されるとともに、現前性と現成化の働きにおいて、「純粋な存在時性」(Vgl.GA35,146,anm.73)が見て取られている点において、前期の存在時性の問題と後期の思索とのあいだの接続が看取され得る。ここでは、前期よりも、「より根源的な時間」(Vgl.GA35,117,anm.47)探求への端緒が開かれているのである。

備考:Martin Heidegger, Sein und Zeit, Max Niemeyer, 1993からの引用は、(SZ 頁数)、クロースターマン社ハイデガー全集からの引用は、(GA 巻数、頁数)にて示した。